



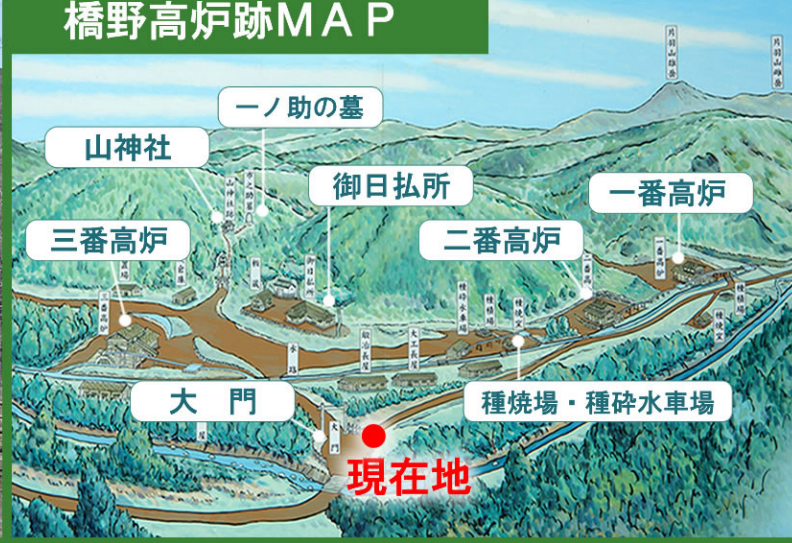
橋野高炉跡を世界遺産へ

世界遺産候補

橋野高炉跡

橋野高炉跡世界遺産登録推進期成同盟会

橋野高炉跡MAP

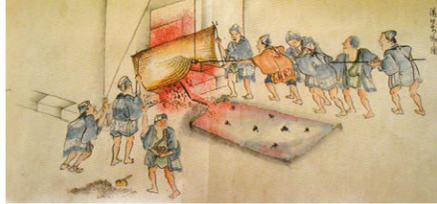


橋野高炉跡の歴史

安政4年(1858)12月1日に大橋において日本で初めての洋式高炉による製鉄に成功した大島高任は、安政5年(1858)12月にここ橋野で仮高炉の操業に成功します。その後事業は藩営となり安政6年(1859)には二番高炉、三番高炉の操業が始まります。

明治元年(1867)6月には銭座(生産された鉄による鉄銭の鑄造所)が併設され活況を呈しました。最盛期には人夫1000人余り、牛150頭、馬50頭が働いた。

明治27年(1894)釜石鉱山田中製鉄所に売却され、36年間の歴史に幕を閉じた。



橋野高炉跡の価値

江戸末期、黒船来訪などにより幕府は尊皇攘夷の思想の元、海防の重要性に迫られた。

安政4年、大島高任は現在の釜石市甲子町大橋で日本初の洋式高炉による出鉄に成功した。ただし、この成功は西洋の技術をそのままコピーしたような、生易しいものではなく、随所にこの鉄産地で培った技術を大島高任は取り入れた。大島はこの高炉を「日本式高炉」と呼んでいた。

その後、釜石には橋野高炉を始めとする13の高炉が立ち並び幕末に東洋最大のコンビナートを形成した。このことはわが国の近代化の始まりでありマニファクチャーから大量生産への転換点となった。

橋野高炉跡の持つ価値はわが国を始めアジアを見ても顕著な普遍的価値といえる。

大 門

大門は高炉の入り口であり、人の出入りを監視した場所でもあった。現在は門の礎石のみが残っている。



種焼場・種砕水車場

種焼場、種砕水車場は高炉に供給する鉄鉱石を加工するための施設。

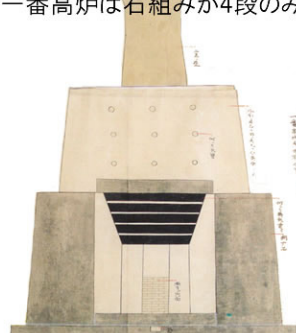


採掘された鉄鉱石は水車の力で破碎し、種焼窯で焼結し、その後金槌で砕き高炉の原料となった。



一番高炉

一番高炉は二番高炉とともに安政6年(1859)に田鎖仲、田鎖源治らにより建設が始まり万延元年(1860)かその翌年に完成した。橋野の3つの高炉はすべて違う構造になっていて一番高炉は石組みが4段のみで上部は甘石に漆喰が塗られていた。



二番高炉

二番高炉は一番高炉とともに万延元年(1860)かその翌年に完成した。二番高炉は石組みが8段の花崗岩で作られている。中央には明治初期のものと思われる炉底滓が今も残っている。

